

日本語教育実習を振り返って —学習者の変化を中心に—

平野涼子

(信州大学人文学部4年・日本語教育学専攻)

1. はじめに

前期の日本語教育実習では、留学生センターでプロジェクトワークの授業参加と「日本語・日本事情」の授業見学をさせていただいた。

本報告書では、留学生センターでの実習で私自身が考えたことについて述べていく。

2. 留学生センターでの実習を通して

2.1 プロジェクトワークという教授法

まず、プロジェクトワークという教授法について田中・猪崎・工藤(1988)をもとに整理することから始める。田中・猪崎・工藤(1988)では、プロジェクトワークとは、学習者が自分たちで話し合っ計画を立て、実際に教室の外で日本語を使ってインタビューや資料集め、情報集めなどの作業を行い、作業の結果をもちよって一つの制作品にまとめる学習活動であるとしている。教師は活動全体を見守って必要な手当てをし、学習者も自分たちの活動を振り返ってみる。プロジェクトワークの特徴として、実社会と接触し、本物の日本語に触れることと、学習者たちが中心になって話し合い、段取りを決めて調査を進めることを挙げている。それに伴って、教師が行う教室運営は、間接的に学習活動全体の流れをコントロールすることになる。具体的に挙げると、タスク目標の設定、レベルに応じた学習活動の設定、教室外の世界に関する情報提供、現実社会でのコミュニケーションに必要な言語の確認、モニターとフィードバックがある。

プロジェクトワークを通して学習者は、これまでの教室内での「ことばのかたちの正確さ」以外に、現実の社会でコミュニケーションを取っていくための「意味のやりとりのなめらかさ」が要求される。言語の四技能を総合的に使用していただくだけではなく、話を進めていくうちに障害があればそれを回避したりする能力や目標言語の社会文化能力も身に付けることもプロジェクトワークの課題であろう。

今年度の日本語教育実習では、上條厚先生の「日本語・日本事情」読解の授業見学もさせていただいた。「日本語・日本事情」は、信州大学の学部留学生を対象に日本語を手

段とした日本語上級レベルの授業及び日本の文化・社会的な事情に関する授業を行っている。授業は、講義形式で進める部分と留学生に発問しながら授業を進める部分を上手に使い分けて進めていた。日本語の正確さと同時に日本語の社会言語文化能力についても指導がなされていた。

どの学習者を指導対象にするかで、教える日本語、授業内容も変わってくるのだということを上條先生の授業見学から感じた。学習者のニーズ分析を確実に行う必要性を感じた。

では、留学生センターにおけるプロジェクトワークはどのようなものであったのだろうか。

本プロジェクトワークは、留学生センターの日本語研修コースの授業で火曜日の3、4コマに開講されていた。指導にあたられた先生は、佐藤友則先生、金子泰子先生である。本年度の参加留学生は、初級レベルが5名、中・上級レベルは6名であった。本プロジェクトワークの参加留学生の特徴として、

- ① 留学生の日本語研修コース終了後の進路が多様である。したがって、必要な日本語能力に違いがある。
- ② 学習者の日本語能力にかなりの個人差がある。
- ③ アジア圏出身(中国と韓国)の留学生が大半を占め、中国人学習者は初級レベル、韓国人学習者は中・上級レベルのクラスに分かれていた。
- ④ 短期語学研修のドイツ人学習者を除く全員は、日本語研修コース終了後は信州大学の学部または大学院に進学予定である。

という四点が挙げられるだろう。

したがって、プロジェクトワークのコースデザインは、上記の学習者に応え得るようなものを作成しなければならず、それが一番の課題でもあり今後の課題となるべき点であろう。

プロジェクトワークの「第8回：日本文化体験」までは、Bridging activityとして位置付けられており、プロジェクトワークで学習者が主体になって活動していくための準備段階であった。プロジェクトワークは、大きくは2つの特徴があり、実社会と接触し、本物の日本語に触れることと、学習者たちが中心になって話し合い、段取りを決めて調査を進めることである。Bridging activityの段階では、前者の活動が中心に設定されており、そこで日本の実社会や日本語に触れながら学習者は日本語の実際使用を体験する。それ以降のプロジェクトワークは、後者の活動のような中心に設定されていた。

では、本プロジェクトワークでは何を教え、習得させることを目標としていたのか。

- ① 留学生が共同で作業を行いながら日本語を実際に使用して、最終的には日本語

で自分の意見を述べたり、相手の意見を聞いたりするような何かを語る場になること。

- ② 言語の四技能が総合的に使用できるようになると同時に、日本における社会文化能力も身につける。
- ③ 今後、日本で生活していくための、または大学・大学院で研究を行っていく際の最低限必要な専門的知識を身につける。

以上の三点が中心となっているのではないかと私は考える。

2.2 先生方の指導

まず、プロジェクトワーク第1回目の授業ではプロジェクトワーク全体についてオリエンテーションを行い、授業の進め方や活動内容・目的等について学習者へ説明されていた。プロジェクトワーク全体の構成は、「第8回：日本文化体験」までは bridging activity として、ここまでで先生方は学習者それぞれの特徴などをつかみつつ、今後のプロジェクトワークで学習者が主体的に活動していけるような指導をされていた。したがって、前半のプロジェクトワークでは全体的に先生方が中心となって教室の前に立って授業を進行され、部分的に学習者主体で活動するという形をとられていた。

実際の学習者主体のプロジェクトワークに入ったのは、「第9回：おしゃべりパーティープロジェクト」からである。ここからは、プロジェクト毎にまず進行役、書記を決め企画会議や編集会議などを行い学習者同士が意見を出し合いながら具体的な活動内容を決めていく。ここでは先生方は学習活動がより意味のある豊かなものにするために各活動開始前には情報インプット・言語インプットを行っていた。そして活動中には、学習者が日本語を正確に使用しているかに配慮すると同時に、意味のやりとりがなめらかに進んでいるかについても気を配られていた。日本語の形の面では、細かい所までは指摘せず、内容を理解していく上で誤解が生じる可能性があるものを中心に正しい日本語に置き換えられていた。意味のやりとりがなめらかに進んでいるかについては、「…とはどういう意味ですか?」「…は、…という意味ですか?」と質問して学習者にさらに詳しく説明させたり、意味の確認を行っていた。一つのプロジェクトが終わる毎に、録画したビデオ等を使ってフィードバックの時間を設定されており、この時間は、学習者それぞれの日本語の発音や誤りの特徴を明らかにすると共に、今後の日本語学習の動機付けを行う重要な機会であった。

2.3 学習者の変化

学習者にとってプロジェクトワークの授業は、他の授業とは参加者、活動内容などにおいてかなり異なっていたのではないだろうか。特に、初級レベルのAクラスの学

習者にとっては、中級レベルのBクラスの学習者がいることや日本人学生が参加していることでかなり緊張していたはずである。ここでは、半年間、プロジェクトワークに参加して感じた学習者の変化を中心に述べる。

・Aクラス(初級レベル)

プロジェクトワーク開始当時は、日本語能力がほとんどついていない学習者が多かった。「第4回：日本人と話そう—その1—準備」プロジェクトの事前練習を行ったとき、大半の学習者が日本語で話したり聞いたりすることが困難であった。ほとんどコミュニケーションを取る事が出来ない学生も中にはいた。また、プロジェクトワークの授業で Bridging activity の段階のプロジェクトでは、Aクラスの学生は先生方の英語での説明がなければ、今どのような授業が行われているかを理解できない人もいたように感じた。しかし、6月頃(第9回：おしゃべりパーティープロジェクト)から日本語を聞く力が次第についてきたように感じた。先生や他の学習者の発言に対してうなづいたり、それまで先生方が媒介語として使われていた英語の説明も少なくなっていた。これは、Bridging activity の時期にAクラスの学生に対しては特にプロジェクトワークの授業内容が、学習者の既習事項の日本語を中心にタスク設定をして、学習者が教室で習った日本語をプロジェクトワークで実際使用できるようにし、学習者に今日の活動内容を報告させる(自分の意見を述べさせる)という過程を重視していたからではないだろうか。「第7回：日本人と話そう—その2—日本人の学生と話す」を例に授業の流れを見て行くと、まず学習者は日本人学生に簡単な自己紹介、家族、出身国について説明しながら日本人学生と会話をする。会話終了後、先生から話した内容に関する質問内容確認の質問があり、学習者は自分のことばで活動内容について報告を行う。報告を行うことで、学習者の聞き流しを防ぎ、相手の日本語がわからなかったり、聞き取れない場合には、聞き返したり、問い直したりするコミュニケーションのストラテジーを身に付ける事もできるのである。国際交流会館でのおしゃべりパーティーでは、日本人や留学生と日本語を使って会話する場面が見られたり、私の質問などにもその内容を理解して簡単な答えが返ってくるほどであった。終盤のインタビュープロジェクトの頃になると、活動中に他の学習者と相談する様子やこれまでは、自分の活動に関して目的意識を持って取り組んでいたように思う。最後の発表会では、学習者の日本語の発音やイントネーションなどもだいぶ聞き取りやすくなっていった。

・Bクラス(中級レベル)

プロジェクトワーク開始時期から日本語の運用力の高い学習者が多かったように感じる。

この半年間で私が感じた学習者の変化は、日本語を聞く力と話し方の変化である。ま

ず聞く力については、学習者たちが日本に来てから日数があまり経っていないことや、母国で受けてきた日本語教育との違いなどから日本語にまだ耳が慣れていないという影響もあり、Bridging activity の段階では、先生方や日本人学生の質問や話した内容について聞き返す場面や分かりにくそうにしている姿が何度か見受けられた。Bクラスの学生にとっては、この段階の教室活動は難しいものではなかったと考えられるが、プロジェクトワークという学習を初めて行う学生が大半であったので、慣れるための準備段階として考えると効果的だっただろう。しかし、Bridging activity の段階以降は日本語が聞き取りにくそうな様子もなく、時々単語の意味が分からない場合は、直接先生に質問する者や他の学習者に共通の母語でたずねる者や、電子辞書で調べたりする者など個人差があった。積極的に活動に参加していた。たまに単語の意味が分からないときなど質問していた。質問の仕方は、個人差があった。

次に話し方については、当初は学生の母語の影響が感じられるような発音(女性の韓国人学習者は語尾が伸びてしまって、切れ目が分かりづらい場合やドイツ人学習者の発話全体のイントネーションが強過ぎる点。全体的には、週末「しゅうまつ」などの長音で発音すべき箇所がある単語を「しゅまつ」というように短く言う傾向など)。しかし、プロジェクトワーク活動中の先生方の指導や発表会後のフィードバックを通して発音は、個人差があるが、プロジェクトワークの終了時期にはほぼ修正されていたように感じる。

- ・全体

今回のプロジェクトワークを受講している学習者の日本語能力にはかなりの違いがあった。しかし、そのおかげで日本語能力が同等の学習者のクラスでは、体験できないような日本語の実際使用、分かりやすい日本語で説明したり、相手に自分の分からない部分を日本語で聞き返したり、問い直す機会が増え、何よりも学習者同士が協力して何かのプロジェクトを作り上げるという関係が生まれ、とてもまとまりがあったように思う。

3. 実習生がプロジェクトワークに参加することの意義

日本人学生が一定期間、留学生の授業に参加することはいいことだと思う。それは、生の日本語に学習者が触れる機会も当然増え、現実には日本人とコミュニケーションを取ることができるからである。また、先生方以外に日本人学生がいることで、パソコンを使用する授業などの個人作業の場合には、先生方の補助を行うことで学習者の疑問などにもすぐに対処できるだろう。しかし、その場合には、日本人学生側にも指導の補助が行えるような能力が要求されるので、事前にしっかりと指導するポイントを

把握しておかなければならない。

学習者と実習生の関係について心的な面からみると、学習者と私たち実習生は年齢が近いということもあり、授業を重ねるごとに親しくなっていたように思う。彼らにとって、日本語研修コースにいる期間は、同年代に日本人の学生と接する機会は多くないので、私たち実習生が参加することで、日本人学生と日本語の実際使用の場が設けられたのではないだろうか。学習者が日常生活で感じている疑問点についても質問されることがあった。

4. おわりに

本年度の日本語教育実習は、留学生センターで約半年間に渡ってプロジェクトワークの授業に参加させていただいた。このような長期間にわたって、日本語教育の現場で勉強させていただけたことは、私の大きな経験となった。今回の実習は、留学生センターの先生方の協力なしには実現できなかったものである。心から感謝を申し上げたい。

現代においては、日本語を学習する人々は、教育している側の予想をはるかに上回って多様なものになってきている。彼らのニーズに答えるような日本語教育の研究分野の確立を私たちは行っていかなければならないだろう。そのためには、日本語教育分野、行政、そして日本人一人一人が協力し合っていかなければならないだろう。今回の留学生センターでの経験を今後の私自身の将来に活かして行こうと思う。

【参考文献】

- J. V. ネウストプニー(1995)『新しい日本語教育のために』大修館書店
田中幸子・猪崎保子・工藤節子(1988)『コミュニケーション重視の学習活動1 プロジェクトワーク』凡人社
日本語教育学会編(1990)『日本語教育ハンドブック』大修館書店